

歴史の全過程の把握の問題にまで遡らねばならないと思われるが、当面の問題に限つていへば、大化改新の思想的支柱をなしていたといわれる伝来の神祇信仰、すなわち、地上の、あるいは歴史的存在に神性を認める伝来の信仰、またその理論的外被としての当代の儒教の論理自身の中に、やがては歴史を超えた超越者に全面的に拝跪しないではないけれども合せてとらえねばならないのではなからうか。例えば、当代の儒教について、それが法家的なきびしさをもつ反面、陰陽・織維の説を含み、それ自身に神秘的な考え方をほらんでいたことが指摘されている。それを単なる指摘に終らせないで、八世紀における災異説の異様な流行への展望を踏まえたいうで、その法家的な論理自体をとらえ、その論理の中核をなしている觀念についての検討がなされねばならないのではないか。また逆に、当時の仏教が果して純粹に抽象された神性への拝跪を内容としていたかどうか、仏教についてのあらゆる常識と固定觀念を捨てた具体的な分析も要請されるであろう。

先に記したように、従来の研究が仏教の先進一退を説く単なる思想交替に終らねばならなかつた欠陥は、第一に古代国家の歴史についての見解の甘さによつてゐる。しかし、仏教政治と儒教政治の交替というような、抽象的な概念を使用させたより根源的な原因は、神・儒・仏というような宗教及至思想形態に対する固定的な把握である。それらは何か神性を求め、何かあるものによつて世界を説明しようとする意識の表現形態であるにもかかわらず、その間の具体的な分析をなさず、外観上の諸特質だけにとらわれ、単純に政治社会の動向と結びつけようとしたところに、仏教政治下における仏教の興隆という機械的な論断と、宗教思想の發展を宗教形態の交替・変遷にすりかえてしまふ表面的な説明がうまれてくる。いろいろな宗教形態の交替の中に、一定の時代社会に生活した人々のいろいろな神性を求めての祈りと、その争闘を具体的にとらえ、そこから出発することこそ一番大切なことではなからうか。そしてこの意味で、この論稿に漸されないものが残るのである。すなわち、古代国家を完成させよう

とする族長貴族の行動といい、古代天皇制の動揺といい、一つの宗教形態としての仏教が、一定の時期に社会的に優位を占めるにいたる契機についての卓抜な見解が述べられていればいほど、宗教思想史として、それぞれの時期における、他の、あるいは先行する宗教形態との連関、宗教意識の發展についての具体的な所論が望まれるのである。

以上、所説を曲解して妄評を加えた点があれば深くおわびしたい。——高取正男——

若林喜三郎監修

山上村青年団編

山上村小史

象牙の塔などという古めかしい言葉は、もう誰も余り口にしなくなつたようである。

それだけ学問は象牙の塔をはなれて大衆化したことを意味するのだろうか。それともむしろ学界に対するそのような批判が、何らの効果も期待し得ないということを感じた諦めの結果と見るべきだろうか、しかし若い人達の間には、大衆の生活の中に入つて、そこから

問題を見出そうとしている者も少くない。とはいえ、未だそれらが実際に一つの形をなしてあらわれたものは少いように思はれる。本書はそのような中にあつて、石川県の一僻村の青年団が四年の歳月をかけて編纂した村誌として、それが小史と名づけられた如く二百頁足らずの小著ではあるけれども、そこには多くの問題が含まれている点において、日陰に埋もれてはならないものの一つと考えられる。

本書の編纂の指導と監修に當つた金沢大学の若林喜三郎教授は、監修者のことばのはじめに、「昭和二十五年の夏、史料採訪のため、学生や青年団の諸君と山上村の各部落を歩いた時、ある部落で農家の主婦から、あんた方そんなこと調べてまわつて何にしなされる。そんなひまがあるなら、ちと金もつけになる方法でも教えて下さらんか、わしらは働いても働いても食えないんじやから、とど鳴られたことがある。——その言葉には真実がむき出されていて、びしりと胸にこたえるものがあった」と記している。しかしこの主婦の言つたような言葉は、少くともフィールドに足を

入れた人ならば、一再ならず耳にした所であり、また耳にしなくても、相手に何らの益も与えることのない調査や聞き取りを強いていることに対する反省を経験しないものはないだろう。そこで或る程度学問に対する疑問や反省を持つにしても、大抵はそのままにしてやり過ぎずのが常である。しかし若林教授はこれをやり過ぎることなく、「この一農家の主婦の遠慮のない言葉は、古い歴史に対する鋭い批判とも受取ることが出来る。農民や農村

を対象としながら、いくら働いても食えない現実を解明しようという意図をもたない歴史であるならば、大部分の村民にとつては意味のない閑文字にすぎないことにならう」と、青年団の村史編纂事業に進んで協力し、この意図をもつて全編を貫いて行つたと見られる。しかし若林教授にこの意図を一貫させたものは、やはり山上村の青年達の熱意であつたらうことは、あとがきに記された研究過程や、執筆分担の中にこの村の青年も加つていることから察せられる。またこの村が、モデル農村として農林省の指定をうけ、新農村建設の試験台となつた程度の進歩性が村民の中に

あることにもよるのであろう。村長が序文の中で「歴史は古きに従うのではなく、古きを克服する途を発見するでだてを与えてくれる」と述べていることによつてもその一半が覗われる。

郷土誌の編纂には幾多の問題が懸けられており、近年全国府県誌も数種現れ、綴方風土記等の新しい試みも見られるが、多くは郷土研究の第一期ともいへば昭和初期のものと大差のない形態をもち、しかも第一期のそれが文検の影響による所が多かつたと同様に、最近のものは社会科学の学習に少なからぬ影響をうけている。本書も叙述形式としては、従来のもとの大きな隔りをもつことが困難であつたらうことは当然であつて、山上村のあらまし、から始まり、自然環境、村の遺蹟、村の成立を述べ、産業に及んでいる。しかし、それを貫くものは、前述のように村の「現在の問題を解決するための手がかりを得るため」であり、従つて自然環境の章にも、水害とその対策、村の成立についても、近代農村へのあゆみを説き、産業の後へは章を改めて或いはエンブリーの影響をうけたと思はれる

村民の生活の変遷および、新農村建設の諸問題をかまうている。しかも「村民一般に誑んでもらうため」のものとして、一貫した態度を堅持していることが、この書に一つの生氣を与えている。

石川県山上村は、金沢平野を形成する広大な手取川扇状地の扇頂に近い手取川南岸の村で、川沿いの狭長な低地を除き大半は山地にかかつている。従つて集落は多く川沿いの山麓に配列する。手取川扇状地は、一部に糸里遺構も見られるほど、開拓も古く、扇状地上が殆んど隅なく水田化し、集村の配在する特異な地域で、従つて灌漑用水路も極めて発達しているため、それらの点から、地理学研究のフィールドとして歴々取上げられている所である。この地域の一部である山上村に關し、先づその微細地誌的な分析が、最初の自然環境の章に於て取上げられているが、これは金沢大の助教授齋藤晃吉氏の協力研究によるもので、地域区分、氣候、地形、から土地利用に及び、特に平坦な扇状地上の水田化をもたらしした宮竹用水についてのかかなり詳細な記述と、このようにして作られたこの村の貴重な

水田も、扇状地上にあるため水害の危険をまぬがれ難く、村民の生活安定に必須な水害対策に論及している。そしてこの地における人々の生活を考える手だてとして、村内茶臼山の古墳や三つ屋の須恵器から、その時代を考察し、式内社である長滝の多伎奈美社や瀧谷寺の寺蹟から、山間の谷間が、先住の地であり、次第に庄園時代頃から低地に降つて来た」と論証する。更に封建時代に入り、加賀藩の支配下における農民の生活が語られ、それが、維新後の状態、さらに現在の農地解放後のそれと対比されるが、農村の近代化は果してこのようにして達成されていつたかどうか、明治以後の農業経営について第五章が設けられている。藩政の下に於て完成された宮竹用水とそれに伴う水田化は藩の収入増のためであつて農民のためでなかつた。人口の増加は求したが、それは無償の労働力ではなかつた。その結果零細経営に苦しむ農民は副業と出稼に活路を見出すほかなかつたが、維新後もその状態には何らの変化もない。養蚕、製炭、わら工品はここに生れたものであり、職工、女工の出身地となつたのもこのた

めである。明治末期から起つたこの村のマニユファクチャーの繊維工業も、この村の余剰労働力に根ざすもので、北陸一帯に共通する所である。而もこの機業の發展に有力な貢獻を果したものは、宮竹用水で、昭和四年に電力に切換えられるまで、この用水を利用した水車が、この地の機業の動力源であつた。その後産業革命と太平洋戦争とを經過しながら、現在の可動機総数五九三台に及んでいるが、いまだマニユファクチャーの域を脱していない。それにしても、戦後の急激な復興に対し、現在再び急速に不況が、特に繊維工業の上に覆いかかつて来た。それを本書では、各国の戦後の復興が、アメリカを中心し過剰生産に向い、それが直ちに日本にもびびいたからであるとし、それを脱するためには、工場立地条件を再考して、転換を計らねばならぬとし、工場立地に触れ、この地の交通が余り便利でなく、労働力は豊富、低廉で、原料、燃料が手近かに得られるかわら工業が、従来は余り發展していないが、将来経済的に有利な事業であろうと予断している。しかしこれは果して妥当な見解であろうか。また機

業についても、この村の工場立地から、それは余剩勞力を吸収する合理的な型で、通勤距離が短縮され、風食時には各家庭に帰ることができる。これがこの村の工場の強味であるとし、そのような経営形態、更に余剩勞働力を生み出す農村の問題、世界経済との關係についてはここでは触れていない。

しかし明治以後における村民の日常生活はどのように變つて来たか、その變遷に関する記述は、従来の郷土誌には少い新たな形態で、前にもふれた如く恐らくエンブリーの「須恵村」を範としたものであらうと思はれる。そこでは村民の公民としての政治的な生活状態、および家族制度を中心とした家の問題、生活圏、消費生活および教養の問題にまで及んでいる。

このように種々の角度から問題を提起して最後に新農村建設にはどのような問題があるかという章を設けていることは極めて妥当であり、而もそれが、新農村建設計画の成立、その進行と問題、生活改善と農政文化という三つの課題に分つてそれぞれ、ある一家での、公民館での、婦人会での座談会形式をと

つている。最初にこの談話にすべて仮定であることわつてあるから大部分創作的に論旨をこの形式で進めたものに違いないが、實際の会話のモデルもあるのであらう。ともかくこのような形式をとり得るだけの、研究者の村民との接觸の深さが察せられる。またここでは可成り問題を収約して突込んだ所もあり、問題の取上げ方などから押して、編纂者の意圖の重点でもあらうかと推察される。

以上概略の内容を述べて来たが、要するに本書は性格は異なるがかつての渡辺氏の「甲東村」などとは異り、「村民一般に讀んでもらうため」の啓蒙の意味をもち、記述にもその点に注意の払はれていることがうかがわれる。がそれと同時に学術的な研究態度も決して失つておらず、その兩者の統一として本書が成り立つていることは、巻末に郷土史対照年表と、古文書類とを掲げていることに現れている。しかも現在の問題を解決しようとする意圖にとにかく貫かれて点、今後の郷土誌編纂に一つの示唆を与えるものといえるだろう。

しかしながら、内容概説の中途に於ても触

れた如く、問題の解決には必ずしも妥当なものを示しているとは限らないように思はれる。現実の問題に直面する時には、所謂学問の無力さも時には感じられないこともない。しかし無力を知ることを恐れて象牙の塔に立てこもることがあつてはならない。勇敢に現実と直面して、その無力を克服する努力を進めて行くことが学問の道ではなからうか。その真摯な態度の上からも本書に学ぶは決して少くない。(一九五三年一月一日山上村役場、A5、一九六頁非売品)

——小池洋一——